

【薬の組み合わせー配合理論について】

では、その配合理論についてももう少し詳しくお話ししましょう。二つ以上の薬物を同時に使用する場合、その薬としての効果を考える時に相加・相乗といった協力作用と相反する作用でそれぞれのいい面がうち消される拮抗作用とがあります。この二つの薬物は、絶対に同時に使ってはいけないという場合（これを配合禁忌といいます）もありますね。こういった配合理論は、十八世紀に近代西洋医学が生まれる中で科学的に考えられてきましたが、東洋医学の世界ではすでに紀元前より生薬を丁寧に組み合わせ使っています。

こういった漢方薬の教科書が、神農本草経（しんのうほんぞうきょう）とよばれる書であり、ここに「君臣佐使」の考え方が述べられています。君薬は、その薬方の中で最も大切な役割を果たす薬物で、臣薬は君薬の働きを強める、あるいは速やかに作用させる働きがあります。そして佐薬は副作用を予防し、使薬は薬全体を呑みやすくするようにと調合されています。

小柴胡湯（しょうさいこうとう）を例にとりますと、君薬は柴胡（さいこ）と黄芩（おうこん）で、臣薬は生姜（しょうきょう・ショウガのことです）と半夏（はんげ）です。この二つで小半夏湯（しょうはんげとう）という胃腸のクスリになっているくらいです。そして、残りの人参、甘草（かんぞう）、大棗（たいそう・ナツメです）が佐使薬となって、調合されるわけです。一つの薬方の中に、七つの生薬が入っていて、見事なハーモニーを奏でていますね。ですから、漢方薬をお出しする時に特別に胃腸を守るお薬を出す必要はありません。全部、その中に入っているのです。